



鹿屋体育大学における武道礼法指導（剣道）

竹中 健太郎

伝統武道・スポーツ文化系 講師（剣道）

1 はじめに

今日の日本社会は、「日本の文化と伝統の継承」の重要性が強く叫ばれている状況にあり、学校教育においては中学校の武道（保健体育科目）が必修となる。その武道を日本文化として正しく伝承しようとするとき、武道の心の現れである「礼法」を抜きにしてその達成は考えられない。我々が日々精進する剣道も武道の一つであり、伝統的な文化性と精神性を正確に後世へと継承するためには、礼法に対する正しい見識と実践力を身に付けた指導者の養成が求められる。そこで、国立大学法人で唯一の武道課程を有する鹿屋体育大学（以下、本学とする）では、剣道を専攻する学生（以下、剣道専修学生とする）への礼法指導を「伝統文化剣道」の正しい伝承、継承の根幹となる重点指導項目として位置付けている。

「体育大学における修養的教養の未来」をテーマとする本フォーラムの開催にあたり、本学剣道専修学生の授業及び課外活動における礼法指導について、その取り組みの内容を紹介する。

2 授業における剣道礼法指導

1) 武道課程の剣道にかかわる科目と指導内容 ～正しい礼法の理解と意識的实践～

現在、武道課程の剣道にかかわる科目は以下の通りである。

1 年次 専修武道理論＜剣道＞ (2) ※ 武道基礎実習＜剣道＞ (4) ※

2 年次 専修武道実習＜剣道＞ (4) ※

3 年次 専修武道実習＜剣道＞ (4) ※ ゼミナールⅡ＜剣道＞ (4)

4 年次 専修武道実習＜剣道＞ (4) ゼミナールⅢ＜剣道＞ (4)

() 内数字は単位数、※は必修科目

理論（専修武道理論剣道）においては、1 年次に受講し、剣道の歴史及び理念を踏まえた上で、礼法の意義、現在の礼式に至った歴史的背景を学び、正確な所作の方法論を習得する。特に「道場における三礼（道場・師・お互い）」における礼の意味と対象別に細部における正確な所作の理解を中心としている。

実習科目（武道基礎実習剣道－1 年次、専修武道実習剣道－2～4 年次）においては、指導法、形、基本技稽古法、審判法の実技演習を通じて、理論で学び得た礼法の徹底実践を行うこととしている。

さらに3 年次以降は、剣道論ゼミナールにて深化した専門領域（模擬刀による剣道形演武など）の追求を目指す過程で、礼法（刀の扱い方における作法など）の深い理解と実践力のレベルアップを目指している。

いずれにしても、実技同様に礼法においても正しい所作の繰り返し実践（反復）が、礼法所作を洗練し、品位を生み出すものと捉えている。周知の通り日本文化は武道に限らず「型（形）」が存在する。茶道、華道、書道、禅、能などすべて「型」に身を投ずることが修練の基本スタイルである。決められた所作、手順によって正確無比な形を作ることから見れば、礼法もそれまた「型」である。授業での礼法指導においては、まず正しい礼法所作と手順の理解とその意識的实践を重要視している。

2) 礼法指導における留意点

本学における礼法指導は、節度と緩急を用いた重厚な所作の体現を重視している。そのうえで、礼法の実践は「相手と合わせる」ことを努めて行うよう促している。

剣道で言われる「合気」とは、実のところ礼法の時点で相手と気を合わせるところからはじまる。立礼から抜刀、蹲踞そして構えに至るまでが相手と合気であれば、おのずと構え合った瞬間も合気ではじめることができよう。そこで相手と気を合わせる方法として、節度と緩急のある所作を心がける必要がある。節度と緩急は礼法所作の品位や風格にも直結するが、二人が対峙して同じ動作を合わせて行う場合、呼吸（リズム）を合わせるための指標ともなる。

現代の剣道は、試合の隆盛により修行論や上達論よりも、勝負論が先行している風潮が強く、蹲踞をして立ち上がるや否や、審判の「初め」の宣告と同時に相手に飛びかかる（技を出す）試合者も少なくない。高段者からは「軍鶏の喧嘩」と比喻される有様である。しかしながら、前述した礼法（節度と緩急のある所作）の実践を二人の選手が「お互いが相手に合わせようとする心」をもって行えば、必然的に蹲踞から立ち上がると、対峙しての攻め合い（間合いの攻防）から「剣道」がはじまることとなる。以上のように、現代剣道の技術的な課題とリンクさせた礼法指導のアプローチも行っている。

3 課外活動における礼法指導

1) 課外活動（日常の稽古）における礼法指導 ～正しい礼法の習慣化～

本学の剣道は、授業と課外活動の両輪で形成されている。従って、双方が独立したものではなく、いずれも一元的な自己修練の場として位置付けているため、授業で実践する礼法を課外活動でも忠実に執り行う。

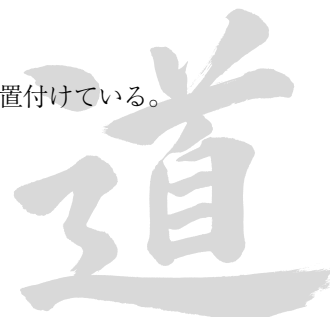
しかしながら、課外活動においては、対外的な活動（各種大会への出場）が伴うため、代表選手の選考を行わざるを得ない。その結果、授業よりも競技的側面が色濃くなり、技量の優劣を決定する場面が増大する。つまり、選考試合はもちろん、対外試合にむけた試合稽古が頻繁に行われる。そのため課外活動での礼法は、授業でのそれよりも正しい実践力が問われる。感情の起伏に左右されない礼法の実践力が求められ、特に己に不利益な場面（負けた時）での正しい所作の実践は、人間形成を理念に掲げる剣道において礼の根幹といえる。

また、本学の日々の課外活動（稽古）においては、気力、体力の限界に達する修練を良しとしている。従って、相手が変わる度に執り行われる礼法（蹲踞と相手への礼）を正確に実践する余力が失われるほど、心身が酷使されることも少なくない。その局面において、なお一層「礼」に思いを馳せ、「正しい礼法」を行うよう促している。

しかしながら、昨今の剣道修練の現場においては、稽古の時間的な能率向上をはかり、礼法を略式（蹲踞を省略）で行う習慣が一般化しつつある。掛かり稽古などで短時間で頻繁に稽古相手を変える場合、この略式をもって礼法を行う場合がある。本学では、この略式を用いずに、稽古においては終始一貫して正式な礼法（全日本剣道連盟が定める礼法所作）を執り行うこととしている。つまり課外活動での礼法指導は、自身の心や体力等の如何なる条件下においても礼法を疎かにしない意識の養成とその習慣化をねらいとしている。

2) 対外試合における本学代表選手の礼法

対外試合は、剣道専修学生にとって「日々の修練（授業と課外活動）の成果発表」の舞台と位置付けている。





また武道課程を有する本学の代表選手が、「武道としての剣道」を発信する機会ともいえる。従って試合場での礼法においても、代表選手には本学の平常の取り組みの披露を期待する。いうまでもなく、剣道の技術と同じくして、礼法も一朝一夕で身に付くものではない。正座における左座右起と跪座、正座時の道具の配置、道具の着具と脱具の作法、移動時の竹刀と面の持ち方と取り扱い等、所作と立ち居振る舞いの細部に渡り妥協のない継続的な日々の実践をもって、習慣化されるとともに洗練される。それ故に本学では、正しい礼法が身に付き、洗練されていることが代表選手の要件としている。

また、試合を観戦、応援する立場における「礼」も対外試合での重要な留意点としている。特に、たとえ本学選手が勝利しようとも、その内容が相手の反則によるものであった場合は、拍手をも慎む配慮が必要である。武道の試合場としてふさわしい、公明正大な試合場の雰囲気作りのためにも、観戦者、応援者の礼に則した態度の養成も本学剣道における礼法指導の取り組みの一つである。

4 まとめ

本学武道課程に所属する学生の大部分が、幼少期から武道を志し、これまでの成長過程（中学や高校）において礼法指導を受けて入学に至っていると考えられる。剣道専修学生においても若干の温度差はあるものの、礼法の技術的な所作（礼式）は入学の段階で概ね整っているのが現状である。本学での授業と課外活動における礼法指導により、その内容を更に深めるわけであるが、実のところは剣道で培った「礼」の心得が、日常生活に反映されなければ全く意味をなさない。

昨年の国際武道シンポジウムでは「道場外での礼法」「集団から離れた場面での個人における礼法」が話題となった。あらためて「武道礼法の日常化」の重要性を再認識したと同時に自身の日常の立ち居振る舞いを自問自答した次第である。礼法指導を礼法教育へと発展させ、修養的教養へと導くためには「礼」に内在する「心」の理解が伴った礼法の実践力が問われる。つまり、我々は武道礼法を決してその場限りの「形式」にしてはならないのである。「日本文化武道」にスポットが向けられた今、本学の武道課程（剣道）の礼法指導においても、今まで以上に「実社会に生きる武道礼法の実践」を念頭に据える必要があると考える。

参考文献

- 1 前阪茂樹（2008）専修剣道論、鹿屋体育大学剣道論研究室
- 2 井上正孝（1986）剣道はこう学べ、玉川大学出版部、pp.19-24、pp.126-128
- 3 野中日文（1988）武道の礼儀作法、柏樹社、pp.14-21
- 4 馬場武典（2005）月刊剣道日本4月号、スキージャーナル、歴史を振り返って剣道の「礼儀作法」を考えてみよう、pp.30-37

